慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	辺境政策と国族理論 : 中国々民党の辺境理論と三民主義
Sub Title	
Author	加田, 哲二
	小林, 宗三郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.4 (1940. 4) ,p.553(93)- 582(122)
JaLC DOI	10.14991/001.19400401-0093
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400401-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

邊境政策之國族理論

―中國々民黨の邊境理論と三民主義

加田哲一

小林宗三郎

次の様に述べてゐる。 その著「三民主義」の劈頭において、 支那民族主義とは何にかと云ふ質問に答へて、

單に云ひ得る。即ち民族主義とは國族主義のことである。八改造文庫版•孫中山、三民主義、一六頁) 「民族主義とは如何なることかといへば、中國の歴史上に於ける社會習慣等の狀態を按じて、私は只一句を以て簡

織的なものから蕿展的なものへと移行しつゝあつたのである。| 國族理論は、孫文民族主義の基本部分を形成するものでは 一九二三―四年の間に完成されて行ったのである。〈加江邑一、三民主義論〉そこで、後に述べる様に、民族主義理論も組 あるが、弱少民族を併合して行からとする民族理論の發展的轉換に際しては、聊か足手まとひと成つた感が有る?本稿 孫文の三民主義は、 一九〇五年一鵬その外面的完成を遂げ、 更に支那革命の遂行と共に漸次内容に修正が加へられて

一一二頁參照

邊境政策ご國族理論

九三(五五三)

質に國族主義をもつて支那民族主義の顯著なる特徴だと考へたのだつた。 何を用ふる。此の際、彼は此の字句を以つて、單に民族•民族主義と同意義に解

私のいふ民族主義 所謂「國族主義」の持つ內容は何んであるのか。これは、支那民族主義及び民族運動の特質をなすもの -國族主義--は中國には適當のものであるが、外國人には不適當である」《同書同頁》

不適當である。香港にしても英國の領土になつてゐるとはいへ、 に數民族を有するものがある。英國の如きは現在世界の最大强國であるが、彼等の國內に於ける民族は白人本位で、 **漢以後、都べて一個の民族が一個の國家を造成してゐるが、外國では一民族で數國家を形成せるあり** 余褐色人や黑人を包擁し、大不列顚帝國を成してゐるのである。 、が参加してゐるではないか。又印度にしてもその通りで、三億五千萬の印度人が居るから、 「私は、民族即ち國族といふことは、 御承知の如く英國の基本民族は、アングロサクソン人であるが、 從つて、外國に於ては民族即ち國族と謂ふことは出來ね」(同書一七頁) 中國には適當であるが、外國には不適當であると述べた。それは、 その内に居る民族中には、 從つて、英國に於ては民族即ち國族といふ言葉は アングロサクソンは單に 數十萬の中國人たる漢 國族即ち民族といる 中國は秦

孫中山の所謂「國族」は、通常去はれてゐる民族と國家とが何等の矛盾撞着なくして、完全に一體となつた狀態をば 斯く呼んでゐることが明白となつた。然らば彼は、民族及び國家に對して、 更に進んで、 分析して見る必要がある。

彼は、民族を以つて自然的所産、國家を以つて武力的所産と見る。

自然の然らしむる所であるから、英國が如何に覇道を用ひても改變することは不可能である。八同書、一七一八頁: 領土があらうか。古より今に至るまで、國家を造成するには皆覇道を用ひてゐるが、民族はこれと違つて、 に敗れた爲めに、香港の人民と土地が英國に歸してしまひ、今日の香港となったのである。印度にしても、 同じ經路を踏んで來たのである。英國人は「英國に日の落つること無し」といふが、一つとして覇道を用ひなかつた 定れ民族である。 央國人を歡迎して出來たものではなくて、英國人が武力を用ひて割據したものである。 一民族は自然の力で造られたものであるに反し、國家は武力を用ひて出來たものなることは歴史の證明する所で 中國人の所謂「王道是順乎目然」なる一句は、 武力は即ち是れ覇道であつて、 少しも無理がない。香港の幾十萬の中國人は團結して一民族を成してゐるとはいへ、これは 覇道を用ひて成れる團體即ち國家である。香港は決して香港人が 自然力即ち是れ王道にして、 王道を用ひて造られたる團體は 前に、中國が英國との戰爭 これと 自然に

本主義國家アメリカ合衆國から受けた民主々義的影響が最も大きいと云はれてゐるが、しかし民族・民權・民生の諸原理は 歐米理念から盲目的に借用して來たものばかりではなく、支那の生活・歷史・傳統に巧に統合してゐる所があるのである。 那革命の歴史、三一頁)むしろ、三民主義は、卓越した孫文といふ個性と、その理想主義の燃ゆるが如き情熱の内に、 六三頁、勿論、その内容が、漸次整備・純化されて行つた事は事實であらうが、 間に生育した爲であらう。(Kakhontoff: Russia and the Syviet Union in the Far East p. 167. 堀江邑一、前掲論文、一 義綱領は支那のブルジョア民主々義革命の現實の諸勢力にしつかりと結びついてゐた。」とは考へられない。〈武藤丸楠、支 孫文は、支那古來の王道、蜀道思想をその三民主義の内容に、多分に感込んでゐる。通常、孫文の思想内容は、新興資 これは幼年時代、彼が起居した土地は、太平天國の指導者・洪秀全發祥の地に近く、且つその旗の下に戰つた人々の 一部論者が强論する如く、

主義、三田學會雜誌第三十三卷第十一號六頁〉 存在したあらゆる會黨を悉く包容し得る内容をも り込んでゐたのではある いか。(加田哲二、中國國民黨の諸派と三民

國家を形成し得ると云ふのである。 致し得たし叉、一致し得るのである。云ひ換へれば、自然的所産たる民族は、何等の武力的行動をも伴はずして、 孫文によれば、支那に於てだけは、武力的所産たる國家と自然的所産たる民族とが、 民族則國家と云ふ「國族理論」が展開されるのである。 この「王道國家論」こそ、 支那民族主義の第一の特質である。又、この基礎の上 聊かの矛盾もなく、 完全に

-

び民族主義すらも保持し得ない狀態にあるのである。孫中山はこの現狀をは「散れたる一片の沙」になぞらへる。 的なものではなくして、理想若くは囘想に過ぎぬのであつた。支那が民族的統一を完成し、 質の支那の姿を凝視する時、第二の特徴を見出す事が出來るのである。孫中山によれば、 形態をとるものであると云ふのである。然るに、現實の支那は國族及び國族主義を所有せぬばかりでなく、 が今迄にあつたとしたならば、又は將來あるとするならば、と云ふ假定の下に、その時は必ず國族及び國族主義の 支那民族史の流れに沿つて眺める時、支那民族主義の第一の特徴である「國族理論」に到達するとするなれば、 、第一の特質は決して現實 民族主義を主張する時 民族及

護するためには身も家も生命までも犠牲とすることを厭はない。 **人は恰も散じた沙のやうなものだと云ふた。その原因は奈邊にあるか。これは一般人民に家族主義と宗族主義があ** 「中國人は家族主義と宗族主義を崇拜するのみで、國族主義といふものが無かつた。或る外國人はこれを觀て中國 國族主義がないためである。 中國人は家族と宗族に對する團結力が非常に强大であつて、往々宗敎を保 この主義が斯くの如く深く人心に注入されてゐな

がら、 のである」へ同書、 國家に對してはこの犠牲的精神を缺如し、 中國人の團結力は宗族に止まつて、國族にまで擴发されてゐな

て、漢人の民族意識は寸斷せられてしまひ、更にその上、阿片戰爭以後滔々として歐米列强の侵略活動が開始せら をば消滅し盡してしまったのである。殊に、 こそ、支那の現實であると云ふのが、孫中山の見解である。 支那が太古よりして民族意識を全然缺如してゐたと云ふわけではない。だが、 この狀態は拍車を加へられて、遂には、 元・清兩朝に於て、蒙古族と滿洲族とが夫々支配してゐた全期間を通じ 再び立ち上がられぬ様な狀態に追ひ込まれつゝある 色々な原因が、 か」る意識 これ

即ち列强の政治・經濟的壓迫からは、現狀の儘では最早到底逃れ得られない様に思はれる 國民黨の諸派と三民主義、四十五頁參照) のであつた。この間の事情に就ては、既に觸れたものがあるから、 的侵略)の二部面に分けて説明してゐる。而も、 然らば、支那をばこんな狀態に押しやつた原因は何んであるか。支那民族主義の第二の特質 の原因へとその論矛は向けられる。 孫文は、これに對して自然的壓迫(人口減退等)及び人為的壓迫(政治•經濟 支那は今日まで、 前者の壓迫からは辛らじて脱し得てゐるが、後者 こゝでは割愛することゝする。(加田哲二、中國 と孫文には考へられる 民族意識の衰退

裂せしめてしまふであらうけれども、 云ひ換へれば、この様な壓迫は、國家を滅亡せしめてしまふかも ムに注意を要することは、孫文の所謂、 成意識と云ひ得る場合もある 常にその民族意識までも消滅せ 「自然的・人為的壓迫」は、 を根底から除き去つてし まふとは斷言し難い。 しめてしまふものとは限らないといふ事であ 一國々民(殊に支那に於ては國族)を解體・分 ないが、 その國家構成員から民族意識 一民族が他民族を征服

邊境政策で國族理論

がらも民族思想が存在してゐた爲めに、 自然、征服民族は被征服民族の獨立した思想を排撃すること、なつて行くので、 てゐた國民に就ての自覺も次第々々に薄れて行き、遂には完全に忘却してしまふやうな狀態に墮るかも がしかし、その間には相當期間 昔の國家を恢復することを得」せしめる原素なのである。 -長い! **〜**反抗時代がある筈である。 この反撥力こそ「亡國しな やがては自分の國も、

註) 孫中山は、好例として第一次世界大戰當時に於けるポーランドを引用してゐる。

き起してゐる。然るに支那人は、民族の與亡を二度までも味ひながら、遂に完全に民族意識を失衷しつゝあるの 一體、この相違は何處から來るのであらうか。こゝに於て、 既に亡國後長年月を經てゐるが、今倘低强烈なる民族意識を有つてゐて、特殊な國際民 孫中山は、支那を正に絕望の深淵に辿かしめて

に二日無く、 **蟹夷と稱し、** るのは頗る興味あることである。 中國は何故二度も亡國して、 乃ち世界の中央に居するが故に、 民に二王無しと誇つでゐた時代もあつたが、これは中國にまだ民族思想の存在してゐた亡國以前のこ 民族思想が失はれてしまつたのか、甚だ奇怪至極のやうに見えるが、これを研究す 中國は亡國前には文明民族を以て任じ、又强國としての矜持を有し、他の各國を 自分等の國を中國と呼ぶのであるといひ、大一統と自稍し、

餘ケ國を滅ぼした如きは、恰も英國印度會社のクライブが印度の數十ケ國を收服したのと一樣に見ゆるも、 は千年來平和主義を實行 民族主義より世界主義に進み、歴代の總でが帝國主義の下に別種の民族を征服し、殊に漢の張博望班定遠の三十 歐洲人の如き野蠻の手段を用いず、 所謂王道を以て弱少民族を收服したのである。

るに猶太は、 亡びて しまつた。 亡國以來二千年を過ぎても民族思想が尚ほ存在せるに、 その原因は何かといへば、 云ふまでもなく帝國主義に禍されたからである。」へ同書、 中國は、 亡國僅かに三百餘年で民族主義が全 五〇一

接な關係に結び付けられてはゐるが、孫文によつては、完全に無差別に混用せられてゐる。 全く歴史的發展に影響せられる事なき、世界的侵略主義の意味に取られてゐる。 我々の耳馴れてゐる帝國主義乃至世界主義と、孫文の用ひた意義とは甚だ異つてゐる。第一に、この兩概念は往々密 第二に帝國主義も世界主義も

張しついある。 世界主義・帝國主義・一層支那風に云へば天下主義は、現下の支那には不適當なる方策である。然るに歐米新文化 孫中山は、その猪突的傾向を深く戒めて、これこそ元・清兩朝に入關を許して、國土全體を亡ぼした 三民主義を以つて狭隘極まるものとして排撃し、近代的籠兒である世界主義を主

ことは、天下を收服せしむる絶好の武器だつたのである。云ひ換へれば、この質力こそ、 のは、當時支那は他のいづれの隣邦よりも强大であり、實力を持つてゐたからである。だから、天下主義を唱へる 有利ならしめたのである。然るに、 生植民地である。こゝで唱へられる天下主義は、 文武周公の時代には、天下主義は支那にとつて必要であり、有利な政策であつたかも知れない。 我は魚肉とならんとする現狀に於て、 現在は全く事情を異にする。現在の支那は、歐米列强が互ひに覇を争ふ舞 支那は何んの爲めに天下主義を主張するのだ。 甘んじて列强の侵害に口實を與へることに外ならない。人 支那に天下主義を生ぜし 正に と云ふ

の國籍に入らねばならぬこと」なつたとしたら如何であらうか。又米國が中國を征服しようとすればこれを幇助す は抵抗しなかつたから亡國したので史司法も起つ能はず、總數僅か十萬の滿人に四億の中國人が征服されたのであ 世界の主人公たらんとするならば、これは世界主義で全世界の服從を要望するものである。滿清入關の時も中國人 發達して民族主義の存在が不可能となつたらは、我等は淘汰されて苗族の如く生存する能はざる時が來るで

あら せざるものは好くないのである。世界上の國家にして帝國主義を遂行し、 「大凡一の思想が好いか好くないかといふことは、それが我に適するか適しないかといふ點に存し、結局我等に適 即ち世界主義に服從するか。試みに問ふ、我等の良心は何等の衝動を感ぜぬであらうか。そして世界主義が 岩し中國人の大多數が世界主義を提唱して民族主義を講ぜず、何國人が來て皇帝となつてもすべてこれを たとへ將來列强が皆英國に破られ、 中國も英國の征服するところとなり、 他國を征服して特殊の地位を保全し、全 中國民族が英國民族となり英國

中に投げ込んでしまつたのである。話はこれまでゞあるが、孫中山は付言して云ふ。 元手として働いてゐた一苦力があつたが、 十萬圓近い金を持つ資産家となつたのである。勿論、有頂天になつた彼は、旣に不要となつた竹棒を惜氣もなく海 支那の現狀は危機である。とゝに、孫中山は、竹棒と彩票の比喩論をもつて、その打開策を暗示する。これを要 でもつて當時流行してゐた呂宋彩票を一枚買つた所が、偶然にも、頭彩になつてしまつたので、 次の様な話なのである。曾て、彼が直面した事實談であるが一 長い間の努力の結晶として十幾圓を手にする事が出來た。 香港埠頭で毎日々々唯一本の天秤棒を 數日後には彼は

「この比喩の呂宋彩票は世界主義といふ大金を儲けるもの、 竹の天秤棒は民族主義といふ商賣道具、一等當選は

が來れば民族主義も不用となり、竹棒も海へ投げすてゝよいことになる」(同書、五四頁) 國の帝國主義が頂上に達して世界主義を實現し、 世界の人がみな進貢するといふ黄金時代であるとすると、その時

だが、現在の支那はそんな時代ではない。 曾ては、そんな時代であつたかも知れないが少くとも今はそうではな

藏されてあることを知らなかつたのである。(、同書同頁)、 出來たのであつたが祖先の竹棒を捨てたのは大に早や過ぎた。惜しい哉、祖先は一等に當選する彩票が竹棒の中に 民族主義を講ずるものであらう。 「近來の學生中には、世界主義を提唱し、民族主義は世界の潮流に逆行するものであると云ふものがあるが、こ 英國若くは米國か、我等の祖先の全盛時代に唱へるならば首肯し得るだらう。 獨逸は前に民族主義を講ぜず、 我等の祖光にしても、 世界主義を高調したが、 竹の棒を捨てなかつたらば、我等も一等に當選することが 今日の獨逸は恐らく世界主義を講ぜず、 しかし、現在の中國が唱へるの

に過去にあつた華々しい頭彩の夢にふけり、その影のみを追ふことは無駄なばかりでなく、實に支那を危殆に赴か 孫中山は、この様に戒しめる。 祖先が放棄してしまつた竹棒を再び拾ひ上げることにあるのだ。徒ら

民族は永遠に存續する。」(同書、 今後我等中國人が民族主義を恢復すれば、外國の政治力と經濟力がどんなに壓迫して來ても決して滅亡せず、我

即ち漢民族の國家建設は達成されなければ成らない。 孫中山の所謂、 國族及び國族主義

邊境政策で國族理論

清朝の失政と歐米資本主義の侵略の重**歴の中から生れ出でた三民主義** のであつた。 現實と理想の姿である。 その民族主義理論の本質はか

eres eres eres

も國族社會の完成に則するものであつた。 孫中山は「三民主義とは救國主義である」と主張する。 この牧園運動の實踐である近代的支那の建設は、

けて論述してゐる民族主義は即ちこれである。 然らば、 その質力は蓄積せられる。 支那民族に加へられたる自然的壓迫に對抗する力を涵養する事である。孫中山が三民主義中、 これに用ふる方策に 就いて、 彼は何を選んだか。孫中山は、二つの部面からこれを説明する。 といに於て、 個々の支那人及び全體としての支那民族の素質は向上

例へば彼は、人口減退に不安を覺え、その生育を奬勵する。

新青年中にマルサスの學説に感染してゐるものあるはよろしくない。 人爲的の方法を用ひて人口の減少を實行し、 英國のマルサスが人口論を創設したときに、佛蘭西人は大にこれを歡迎し、種々なる自然的の方法の 今日に到つて人口の過少に苦しんでゐる。然るに中國の現代 須らく民族は永久に保存しなければならぬも

「百年後に於ける全世界の人口は幾倍にか増加することであらう。獨逸や佛蘭西にしても、 人口の生育奬勵をしてゐるから、 必ず二三倍の増加を見るであららが、 全世界に於ける土地と人 大戦後、戦前の狀態に

なつてしまひ、他民族に消化され、人種は滅びてしまふ。へ同上) も豐富な地方なるに、 各國人の併呑する能はざり 從つて太陽の光の爭奪戰と云ひ得ると。 若しもそんな時が來れば、 彼等は皆赤道地方や温帶の土地を得んとして争つたのが原因を 中國は世界中で氣候が最も溫和であり且つ物産の最 中國は主權を失ふばかりではなく、 た場合には、多數の彼等に少數 亡國と

つて舊道德として排斥せらるゝ儒敎々義及び政治哲學が如何に必要なるものであるかを力說する。更に亦、幾千年 は外國に比べて遙かに優れてゐながら、現代の支那はこれに遠く及ばなくなつてしまつた諸科學に關する知 上げる為に無くてならぬものであると論斷する。 彼の民族精神淘冶に闘する重點である。この項に於て、 孫中山は「新文化」の侵入によ

これらの普及發達は、 一面支那人の理性を覺醒せしめると共に、 質的にも量的にも支那民族を强化して行くのである。かくて「中國一國だけで十 他面その道德の向上を來し、更に漸次增加して

第二に、孫中山が採り上げた方策は所謂、「人為的壓迫」を一掃し得る力 具體的に云へば、 半植民地たる現在の支那に近代的な政治型態を備へ、その生産諮力を 清朝とこれが後繼者たる舊軍閥の打倒によつて民權主義を實現 - 云ひ換へれば政治・經濟的實力を支那

滲境政策で國族理論

那民衆を大同團結せしむることであつた。(加田哲二、中國々民黨の諸派と三民主義、參照) 歐米資本主義の侵略を排撃して土着資本を厚生的に育成せしめて民生主義に到達し、更にこの土臺の上に全支

種の會黨を限なく包容し得るに足る內容なのである。 民権主義六講と民生主義四講は、この間の事情を説明したものである。その内容は、「倒滿興漢」を目的とする各

『例へば浙江省の如きは、虔州には王金寳の組織する「雙龍會」あり、衢州には劉家福の「九龍會」、 如く複雑である。其他の諸省も思ふて知るべし。八薜農山 子會」「白旗會」「紅旗會」「黑旗會」「八旗會」等々の如き名称がある。僅に浙江一省の會黨について論じても、名称は已に斯 會」、嚴州には濮振麘の「白布會」、紹興には竺紹康の「平洋黨」、縣縣には裘文高の「鳥帶黨」あり、其他「金錢黨」「祖宗教」 「百 如何に多くの會黨が存在したかといふ事の一例として薜農山は浙江省の例をとつて次の如く云つてゐる。 中國農民戰爭之史的研究 下册 四四六頁)

再び浮び上らなければならぬ問題であつた。このことに就ては、 ととは、やがて、封建制に對する破壞が一應完了し、その目的とした舊軍閥が一掃せられたる時、人々の胸の中に 内に綜合的に包含されてゐた民族、民權、民生の理論が、果して「現實」に何を意味しなければならないかとい**ふ** の事は反面から見るならば、甚だ具體性に乏しい、漠然たる内容だとも云ふことが出來る。そこで、三民主義 こゝではこの程度に止めて置く事とする。 既に觸れた事もあるし、他の機會に再び取り上げ

M

介石の推行せる北伐となつて現れたのである。 かくの如き内容の三民主義をもつて、全支那を更生せしめんとする國民革命の實踐は、 七軍に分つて廣東を發した革命軍は連戰連勝、青天白日の旗の行く 一九二六年七月總司令蔣

黨政權の膝下に收めたのである。 軍の主力を撃破し、更に張作霖を中心とする「討赤聯合軍」を追つて北上し、 ところ反革命軍閥は到る所に敗退したのである。 同年九月、 早くも武漢三鎭を奪取し、 一九二七年初頭には、 一月には九江會戰に孫吳 江南諸省を國民

の北京クーデターの善後處置に關する奉天派・西北派・國民黨の聯合會議に出席する為、 書を立て乍ら、遂に失敗に終つてしまつたのである。そして、

一九二五年三月十二日、 革命尚未成功、同志仍須努力」の遺囑を残して客死したのであつた。 しかし、北伐の完成・國民政府の樹立に至る經路は、決して坦々たるものではない。既に孫中山は再三・再四北伐計 率直戰中に行はれた馮玉祥 敷々の理想を懐いて北上中

廣州事件(一八九五)惠州事件(一八九九)を經て一九一一一二年の武漢革命は、清朝を倒した。

なくてはならないことになつた。 主主義革命は、全く不徹底なものとして中絶せしめられてしまつた。かくして、第二革命第三革命と、ひきつよいて起され 「清帝の退位が實行されるに至つたことは、 (佐野袈裟美 支那近代百年史 一面確かに彼(孫文-筆者)の力によるものではあつたが他の一面において、民 下卷 三三六)

て來た。更に、この理論上の武器に加ふるに、北伐途上に於いて次ぎく~に結び付いて來た軍閥は、實力上の武器 その軍事的・政治的地盤は一擧に擴大・强化され、その北伐が短時日の中に見事に達成せられたのであると云ふ事が は、國民黨の改組である。改組によつて近代的な階級闘爭理論と反帝國主義理論をたづさへた中國共產黨が参加し を提供したのである。この軍閥の参加をも改組の中に含めるのは、聊か當を失するかも知れないが、これによつて、 この難事業を孫文の後繼者達は、どうして易々として完成させる事が出來たのか。勿論孫中山が切り開いて來た 大いに貢献したことは云ふまでもない。しかし、この大先輩の苦難の道にもまして、大きな役割を果したもの

出來るであらう。

註) 独軍閥と國民黨が、三民主義に對して、互に步み依つて來た事は事實である

うな態度をとるに至った。」(布施勝治 ある」と云ひ、七月以降、共産黨を逐ひ出した後の武漢派はいよく に、民徳を以てし、四民主義としたい」と提唱した。その後各方面に反共産、討赤、排露の際、益々高まるや、武漢政府の はれてゐる。即ち「本年六月の半頃(一九二五年筆者)張作霖は山西の閻錫山から頻りに南北安協條件の一つとして三民主 へば閻錫山も眞先に三民主義を提唱したし張作霖すらそれに色氣を示し、民徳主義を加へた四民主義を提示したと云 ボロヂン氏すら「共産主義は理想に過ぎない。 レーコンのロシアと孫文の支那 一明らかに三民主義と共産主義とを別もの扱ひするや 三九一四〇頁) われ等は三民主義を實現するもので

この北伐決行と共に國民黨內部には解き難い對立が發生してしまつたのである。

二五年十月四山會議を開催すると共に、 夙に國民黨一全大會に於て反共を整明した。國民黨右派張繼一派も反共運動を起して、 聯俄容共に對しては、改組の當初から既に激烈な抗争があつたのである。 國民黨内に西山派と呼ばるトプロックを暗默の中に作り上げてしまつたの 極右派と云はるゝ馮自由一派 遂に之等の一團は一九

があった事は否み難い。殊に、 西軍・乃至東北軍との合同の場合も、 軍閥との妥協は、三民主義理論と實踐を甚だ一致し難いものとした。湖南督軍唐生智との協力の場合も、 北伐が一度完成して以來展開せられた國民黨左右兩派の抗争、 双方からの歩みよりがあつた以上、三民主義の信念に對する或る程度の曲節 及び蔣介石の獨裁化

三民主義を中心にした團結は益々緩み、 に對する全面的な反抗運動をめぐつて、「武力」を有する軍閥のだき込みは非常に重要な意義を持つに至るに及んで 國民黨內の對立・分裂の傾向は著しくなつて行つた。

信念ではなくなつてしまつた。 遂に三民主義を中心とした新支那建設ー -所謂「國民革命」を推行し得るものは、三民主義の

こに思想が發生する。思想が構成されると信仰が起り、信仰が出來ると力が出て來る。 それ故主義は思想に始まり 義を信仰せねばならぬ。三民主義を信仰して極めて大なる勢力を發生せしむれば、その大勢力を以て中國を救ふこ とも云へるのである。吾等は今日中國を救はねばならぬか何らか。救ふことが必要であると認めるならば、三民主 とが出來るのである。八民族主義,第一講) 三民主義は救國主義であるといふ。「凡そ人が或る一つの事に就て理論的にこれを研究すれば、先づそ 信仰の結果、力が出て完全に成立するものである。三民主義は中國の國際上の平等、 中國を永久世界に適存せしむるものである。

黨內部の混濁は孫中山の考へとは正に逆、 孫中山は思想→信仰→力といふ發展を信じてゐたのである。然るに北伐强行によつて生じたる 力→信仰→思想の關係と成つてしまつたのである。

優秀なる武力を握り、 ーターシップは叉、三民主義の内容を指定し得ると共に、 潤澤なる財源を擁する者のみが、 國民黨內部の指導權を掌握することが出來るので その信仰に對する一般の大勢を決せ

第一に必要なものは「力」であつた。武力と財力とであつた。改組、 北伐以後、 殊にめまぐるしき走馬燈の如き反

蔣戰を通じて敢行せられたる一切理論と行動の争闘はこの「力」の奪取にあつた。

五

三民主義の所謂「民族」は、主として漢民族に關するものである。この事は、孫中山の行はんとする救國運動 やうとするにあるので、その合句とするものは 一方に於て歐米列强の壓迫を拂ひのけると共に、他方に於て清朝を主班とする一切の封建的所産を除 「倒滿興漢」にあつたのであるから、 これを以つて考べても、民

註) 阿片戰爭時代に於ける清朝は、確に歐米列强とその利害を異にしてゐた。南京條約•天津條約•北京條約と和を講じ乍 異つた趨勢を産み出した。即ち一面に於いて滿治政府は外國資本主義の壓力下に屈服投降し、漸次外國資本主義に賴つて な溝濇統治反對の民衆運動を展開したこと、これである。<、中國現代史研究委員會 相接近せしめ、殊に、李鴻章が一八六二年來滬して「洋槍隊」と行動を共にするに至つて、 とも考へられた。或る論者は云ふ。「外國資本主義の侵入は、中國全體の政治と經濟生活中に於いて、明らかに二個の **▲歐米列强とは對抗して來たのである。然るに「太平天國」の建設ル前後する猛烈な暴動は、淸朝と歐米列强との關係を** 歐米列强に反對する事は、密朝に反對する事によつて達せられたし、海朝に反對する事は、列强の侵略を阻止するも 他方に於いて即ち廣大な民衆は外國資本主義と滿淸統治の壓迫收取の下に於いて、 中國革命運動史、邦譯、二二頁〉

かくの如くにして、、倒滿興漢」の中に、列强の侵略排墜と封建制度の打倒といふ目的を達し得られ

元來支那は、その周圍に廣大な邊境を有してゐる。之等の地方は多く漢人以外の者によつて占められてゐたので 三民主義は決して漢人種の制覇のみを目標とはしてゐなかつた。

實に支那統治上の重要問題である。 支那本土に於ても幾多の弱少民族を包含してゐるのである。之等のものを敵とするか、味方とする

蒙・囘・藏の諮地を合せて一國となし、漢・滿・蒙・囘・藏の諮族を合し、一人となすが如くする、これを民の統一といふ 旣に、孫中山は一九一二年一月一日南京における臨時大總統就任式「宣言に「・・・國家の本は人民にある。漢・滿・ こと云つてゐる。

彼は、將來、 弱少民族乃至被壓迫民族といはるゝものが、 遂には强力なる聯盟を結び、 その現狀を改變するであ

抗するであらう。・・・・彼等は同病相憐み、將來は必ず聯合して强暴國に抵抗する事であらう。 **彫迫國が聯合して强暴國と戰ひ、** 「將來の趨勢を觀るに、如何なる民族或は國家たるを問はず、壓迫されるものは必ず聯合一致して、 全世界を壓倒するであらう。」(三民主義二五頁) そしてこの數個の

萬人は他の二億五千萬人の壓迫を受けてゐる。しかし、この壓迫者の行動は逆天であつて順天でない」と云ふレー 彼は更に「世界上には二種の人種がある。一つは十二億五千萬人、もう一つは二億五千萬人で、この十二億五 の所言を引用して、支那四億の人民も、この順天の行動に聯合する必要あるかもしれないとさへ云つたが、 その以前に支那は先づ自己の民族的自覺を興起して置かなければ成らないと推斷する。

一九二三年一月孫文及びョッフェ聯合宜言以後における孫文に對するレーニンの影響は大きい。彼は「黄白戰爭の如 同人種間に於ける「公理と强權」の抗爭の可能性を信ずるに至つたやちである。

崩壞過程をたどる支那にとつては、 一切の事態が餘りにも急迫してゐた。 か」る狀態にあつては、 自己以外の民

邊境政 策で國族

近代的民族國家の完全するまでは、かゝる方法は彼の採らざる所である。 解體してしまぶ危險があつた。民族主義六誌を通じ、 彼自身の積極的な意見は吐露することが無い。「修身・齊家・治國・平天下」的な考へが彼の推論を支配してゐ の正義親は觸れてゐたのであらうけれども、 だから彼は先づ「天下を平らげんと欲せば先づ其の國を始めよ」と云ふ。一國民族主義 を主張する彼は、弱少民族聯合をも含めたる一切の世界主義・國際主義を排撃する。 孫中山は、弱少民族の共同戦線の必要をは認めてゐるが、 しかし乍ら、 それ等を考へてゐる中には、支那民族自身は の地方に於ける弱少民族に對して、 所謂民族主

先づ失ひたる民族主義を恢興し、更に之を大に發揚し、然して後、
 初めて世界主義の實行を論ず

じたる「自己民族」が餘りにも危殆に臨んでゐた爲ではなからうか。 保せらる可き性質のものであつた。孫中山にとつては、恐らく彼自身の個人的意見としては邊境弱少民族 漢民族と支那に於ける弱少民族(又は他民族)との關係に、漢民族の民族的自立が完成せられるまで、 その協力を期待して居つたのであららが、公然たる意見となるに至らなかつたのは、 に對

こで、民族主義六講の末尾の章句に、彼は次の様に述べてゐる。

と成ることが可能である。 中國の民族には希望なく發達の光明なきものとなる。但し、 この所志を貫徹せしむべく企圖するならば、 我國が强國とならば、今日受くる所の、 列强壓迫の痛苦を想起して、 この濟弱扶傾の大志を有すれば、 中國の民族は發達することを得べ 弱少民族が、 强國 同樣

世界統一を完成すれば一個大同の政治を行ひ得る。この事たるや、 の一分子たる諸君は、 治國平天下を望むには、先づ民族主義と民族地位を恢復し、 正にこの責任を負擔すべきものである。 我等は、 その帝國主義を消滅せしめねばならぬ。而して始めて治國平天下を唱 即ち是れが我等民族の眞精神である。」〈民族主義第 實に我四億萬民衆の大責任である。從つて四億 固有の道徳によつて平和の基礎を築き、 へ得るに 而して

述べられてゐるのである。 建設せられたる國家が遂行する王道政治によつて、あらゆる弱少民族が悉く救濟せらる可き可能性ある旨が漠然と 三民主義全體を通じて、漢民族國家の建設が如何に絕對的必要なるものなるかと强調せられてゐる一面、かくて との聯繫は可能なのである。必要と可能 漢民族の國家建設は必要なのである」 - この思惟の配分こそ、三民主義始姐の弱少民族論の本質をなすもの 一而して、 漢民族國家內の弱少民族の救濟及びこ

六

の巨頭である袁世凱のために、 亥革命によつて、 ところがブルジョア民主々義革命としては甚だ不徹底な中途半端なものとして終つてしまつた。政權は舊官僚軍閥 て、決定的」なものとなるまで、 辛亥革命は異民族の支配から脱せんとする民族主義革命としてはこうに成就されたものと見てさしつかへない。 孫中山のかゝる思想は、その後繼者たる國民黨員によつて引繼がれた。そして、 清王朝は崩壞したけれども、 變更されることが無かつたのである。何となれば、 すつかり横取りされてしまひい(佐野前掲書三四三)軍閥跋扈時代となつてしまつた 新支那は孫文一派の考へた様には生れ出なかつたのである。 一九一一一二年にかけての辛 國民黨の勢力が支那政局

のである。

その經歷の一步を踏み出した張作霖であつた。之等二人は、滿洲王朝の退位と、廣東からアムールに至る國民黨の の殘存者達の掌中に收められたのである。彼等は共和制を承認したが、それに屬しなかつた 求に合致し得る新秩序を創造す可き何等組織立つた政治勢力は存在しなかつた。されば、 出との中間、 これ等の人々は、 何とも為し難き崩壞を認めるが、西洋から支那に輸入せられた理念と制度を持つ新世界を諒解してゐな 北京に於て政権を握つてゐた軍人・官僚の間に見受けられる、多少共開拓的な姿態を夫々代表して 一八九四年舊式試驗制度で「秀才」の學位を得た吳佩学と、滿洲に於ける綠林の徒として East in World Politics: a study in Ecent History 1937 p. p. 206-207) 支那政権の大牛は舊制度 支那傳統から成る

らなかつた。質に彼等國民黨領袖の「力」は、 派をめぐつて安定しようとし出した頃、三民主義にふくまれてゐた邊境諸民族に對する問題は、支那民族自身に關 なものとなつて行くと共に、他方、三民主義理論は黨内の「力」の動揺によつて、その内容を支配されるやうに成つ 一九二六年北伐は完成された。この結果國民黨の實力は漸次强靱となつて、支那政局を左右し得るやら 更に重大なるものであると考へられ始めた。こゝに、彼等の民族理論は發展的修正を加へられねば成 幾度か繰返された反蔣戰と赤匪討伐を經て、やがて蔣介石を中心とした國民黨中央 かくの如く命じたのである。

國民政府の建設計畫が進捗するに從つて、 既に新支那が建設せられたとしたならば、當然、 國民黨主腦部の胸中には、先づ近代的支那民族國家は最早誕生したの その領土を確定す可き「國境」が先づ明

能にされなければ成らぬと論斷した。

明確なる「國境」を設け、 政治権力と、浸滲しつ」あつたヨーロッパ列趾の實質的政治權力とが競合した結果、發生したるものに外ならね。 然るに現實の支那は、 新興支那は清朝が失つた「實力」を恢興し得たのである。 「邊境弱少民族」の對策を立て、 その周圍をめぐる廣大な「邊境地帶」がある。實に、 一學に邊境問題を解決しなければ成らない。 さらば、「邊境地帶」は當然解消す可き筈である。 これは實力を失喪した清王朝の形式的

全會は、次の宣言を發してゐる。 國民黨の「邊境對策」及び「弱少民族問題」は、 かくして夙に、 重要議題となつてゐたのである。既に、 國民黨第

今國民黨在宣傳主義之時,正欲積集其勢力,自當隨國內革命勢力之仲張,而漸與諸民族為有組織的聯絡,及講求種 獲得勝利以後,當組織自由統一的(各民族自由聯合的)中華民國。」(國民黨第一次全國代表大會宣言) 第二方面,辛亥以前,滿洲以一民族宰制於上,具如上述。辛亥以後,滿洲宰制政策,旣己摧毀無余,則國內諸民族 但具體的解決民族問題之方法矣。國民黨敢鄭重宣言::,承認中國內各民族之自治權,於反對帝國主義及軍閥之革命 **小誠意,故今後國民黨為求民族主義之貫徹,當得國內諸民族之諒解,時時曉示其在中國國民革命運動之共同利益。** 宜可得平等之結合,國民黨之民族主義,所要求者即在於此。然不幸而中國之政府,乃為專制余藥之軍閥所盤據, 國民黨之民族主義,有兩方面之意義....一則中國民族自求解放,二則中國境內各民族一律平等, 於是國內諸民族,因以有杭隉不安之象,遂使少數民族,疑國民黨之主張,亦 第一方面···

殊に英・米・佛に對する考慮から出でたものに外ならぬ。中國國民黨の列强侵略排撃に關する見界の變遷を物語るもので 邊境問題と同様に重要なる香港其他に對する歐米勢力の侵入には、觸れる所が少ない。

を暗示する所謂「國共二關スル宣言」に於ても、 この點については、他日再び取り上げる考へである。 一九二二年六月廣東で開れた中國共産黨三全大會は國共妥協

力ヲ集中シテ民衆へノ宣傳ヲ輕視シタコトデアル。前者ハ國民ノ獨立自治ノ信念ヲ失ハシメ、國民黨ノ政治的指導地位ヲ 帝國主義打倒ノ標的ニ向ツテ國民革命ヲ指導シテ來タ。中國ノ政治經濟狀態及ビ社會各階級ノ苦痛要求ニ鑑ガミ、勞働者 危殆ナラシムルモノデアリ、後者ハ國民ノ同情ヲ失ヒ、 ハ外國援助ヲ以テ中國革命事業ヲ成就シャウ ガ國民革命成就ノ軍要條件ト思惟スルヲ以テ、吾人ノ活動ノ中心的使命トスル」 中國國民黨ニ集中シテ國民革命運動ノ實現ヲ早カラシメ 民衆宣傳政策ニ依ツテ國民革命指導者ノ地位ヲ恢復セシメナケレバナラナイ。 ソレニ對スル宣傳ト組織トヲ否人ノ特殊ノ責任トシ、彼等ヲバ導ヒテ國民革命ニ參加セシムルコト ムシロソノ反抗ヲ招ク不利ガア 同時ニ中國國民黨ヲシテ外國依賴ト軍事萬能政策ヲ拋棄 不幸ニシテ從來ノ國民黨ニハニツノ缺點ガアツタ。 中國共產黨八從來軍閥打倒、 ル。故ニ吾人ハ社會上ノ革命ハ、

の邊境地方に對する中央の覇權を押し進めて、彼等の民族主義の理論と實踐に、 長文ではあるが、 《年(民國十八年)三月二十七日である。こゝに可決せられたる決議案は、 |共合作を定めたる國民黨一全大會(一九二四年一月)から六年を經したる後、 その一班を引用することにする。 更に對弱少民族の内容を明確に示し、 變調の跡を明かにしてゐる。 三全大會は開催せられた。 一九二 稍

民主義外,實無第一 本黨致力國民革命,即以實現三民主義爲唯一目的,則吾人對於蒙古,西藏及新疆邊省,含實行三 雖此數地人民之方言,習俗,與他省不同 在國家行政上,稍呈特殊之形式,然在歷史上

示蒙,藏,新疆之人民,並根據國家生存上共同之利益,努力實現漢,滿,蒙,囘,藏諸民族有組織的密接團結, 完成國民經濟之組織,解決自身衣,食,住,行之生活需要問題也。大會於此認爲今後宜本此主義之眞義,以全力昭 時代愚弄蒙古、四歲及漢視新疆人民利益之惡政,誠心扶植各民族經濟政治教育之發達,務期同進於文明進步之域, 族經濟及教育充實之力量,始足以排除國外帝國主義之經濟侵略。本黨敢鄭重述明:::吾人今後心力矯滿清,軍閥兩 濟上,政治上,教育上所處之地位,無稍增進、今幸軍閥之惡勢力已被摧毀,中國境內之民族,應以互相親愛,一致 謀經濟上,政治上,敎育上之建設〉蓋唯國內民族政治鞏固之力量,始足以戢止國外帝國主義之政治掠奪,唯國內民 結於三民主義之下, 一方為打倒列强之瓜分政策。不幸滿洲旣倒之後,國內之軍閥代之而與,列强之帝國主義,一方接助軍閥以壓迫 上,及國民經濟上則固同為中華民族之一部,而皆爲於受帝國主義壓迫之地位者也。醫辛亥以前 使人民能行使直接民權,參與國家之政治,於民生主義上,乃求發展國內一切人民之經濟力量, 的團結,成一强固有力之國族,對外水國際平等之地位,於民權主義上,乃求增進國內部民族 為達到完全排除外來帝國主義目的之唯一途徑。誠以本黨之三民主義, ,庶足以保持中國永久之和平而促進世界之大同也。」(第三次全國代表大會對於政 變武力的侵略為經濟的壓迫,其結果遂令蒙古,四藏及新疆之人民,在 於民族主義上,乃求漢 之宰制

國民黨及び政府は、邊境地帶の特殊的性質を承認する旨に就いて屢々聲明してはゐるが、 支那領土たる點に關しては些も譲らない。 然もそれは「國家生存

ゆうと明確に規定してゐる。 國民政府は中華民國訓政時期約法に於いて、 「中華民國の領土は各省及び蒙古西藏とす。」(同法第一

英露勢力圏劃定に闘する協定により、 に止まつたが、東部及内蒙古に對しては、民國十七年(一九二八年)一擧に中央化して、熱河•察哈爾•綏遠の各省を 既に、新疆・寧夏・青海等の西北諸省は設置せられてゐた。 外蒙人民共和國に對するロシアの勢力圈をイギリスが諒承する代償として生じたる西蔵方面に關する 支那は全面的に敗退して僅に西康特別區域(舊川邊特別區域)を改省する程度 西蔵に関しては、 一時英・露・支三國間の抗爭場裡とな

その第四條において「中華民國の領土は、江蘇、浙江、安徽、 故に、訓政期を終へて、名實共に近代的な新支那が建設した際に施行せられる豫定である中華民國憲法草案は、 蒙古及西巌等を固有の疆域とす」と規定してゐる。 廣西、雲南、 貴州、遼寧、 江西、湖北、 吉林、 黑龍江、 湖南、 四川、 熱河、 察哈爾 西康、河北、 綏遠、 寧遠、

〈註〉 蒙古及西藏とは、既に英露の勢力下にある外蒙及西藏を指すものである。

蒙古・西藏に關しては、既に清朝時代に理藩院あり、 後に蒙蔵院と改組され、 更に國民政府の成立に際して、

一、蒙古・西蔵地方の行政に關する事項

一、蒙古・四臟地方の各種改革に關する事項(蒙臟委員會組織法第二條)

に就き適當の處置を講ぜしめた。同會の委員長、副委員長を初め九名乃至十五名の委員の任命權は、 一切國民政府に歸屬

たいである。それは、支那に生活する諸民族の同化によつて、 孫文以後の國民黨は「漢・蒙・囘・藏の人民の密接なる團結によつて强固・有力なる一國族を形成」しようと考へ 實に發展的な國族理論である。 漢民族の國家建設を目的とした多分に復古的要素を含んだ歴史的國族理論であつた。然る 新しき民族國家を創造しようとするものであるが故

一度民族問題に成ると、彼は漢民族の復興と云ふ囘顧的なものと成るのである。 孫文は、「反清復明」といふ清末に於ける諸會黨に屢々見受けられる合句を批判する、即ち反清は良いが復明は時代遲 四四八百)統治者、王朝に對する彼の考へは、確に進步的であるが、しかし

國族理論の歴史性から創造性への轉化し 云ひ換へれば支那資本主義の發展が、諮族同和的な國族理論から一族專制の國族理論へと導きつ -それは、支那國民革命の段階に沿つた進展に外ならない。 更に又、こ

特殊性を有する邊帶地帶との間の論争へとし て行つたのである。そして、その具體的な現實の形態は、軍閥其他一切の封建制への抗爭から、 支那民族問題の核心は、漢民族自身の民族的自立の問題から、漢民族對邊境弱少民族の問題へと移行 **-政治上の舞臺を轉換したのである。** 支那の領土高權と

4

動といふやうな現象は、斯くして生ずるのであるが、 政治統制力が衰退するか、或は接續してゐる二國間の「權力の均衡」が動揺するかによる。 然らば、支那民族問題の焦點を移動せしむるものは何か。元來、邊境問題、弱少民族問題の發生する原因は、一國 概ね「國家總力」の消長に歸せらる可きものである。 內亂·領土併

邊境政策で國族理論

生してくる素地を形成してゐることは確實である。 格を與へるものではないのである、 歴史過程を經て來た現在の國家は、多くの場合、 俗を異にしてゐる之等「邊境」の文化的複合分子は、國家總力の消長に應じて、 これを具體化せしめる「力」は、 勿論、それは何處までも 「邊境」地帯に於ては、 物的に多分に複合的要素を含んでゐるのである。 國家自體に付隨するものなのである。 この傾向は著しい。だから中央とは言 時折「邊境問題」として發 **邊境問題に具體的な性**

のではなく經濟上の能力をも含めたるものである。(Benoy 民族總力或ひは國家總力と云ふのは、單に一民族乃至國家の陸海空軍の裝備 Kumar Sarkar: The Politics of Boundaries p, 15-17) 即ち武力だけを意味するも

支那邊境問題乃至邊境民族問題も又、 その儘、邊境地帶に反映して、「問題」の性格を規定するのである。 斯くの如き線に沿ふものであつた。 云ひ換へれば、近代支那の國家總力の

民」をも加へて、著しく擴大されて行くのである。 「的國家」を主張するのみであるが、その充實するに從つて、その意味する所は、 その力の劣弱なる場合に於て、 支那民族主義の内容は「漢民族」のみを内容として、 「民族の一部」を構成する 僅に「諸族同和」「民族自由聯

るまいか。この必然的傾向に對しては、正! なのである。之に對し 何故なれば、多くの場合、邊境地帯に於ける弱少民族は、 國の國家總力が充實し、發展して行くに伴つて、 邀境異民族に對する指導力が増大して行く 適當な指導力を加増して行く事は、 不正! - との傾向は、古今を通じて、 邊境若くは國境方面に對する支配力・統制力が漸次强固と成 の價値判斷を下す可き性質のものでは無いのである。 自分丈けで立ち上る力 必ずしも不正では無いばかりでなく、 寧ろ「必然」と称すべ 、きものでい 「必要」でさへ はあ

あることがある。

に對する指導力と邊境民族自身の意思とを對比した時、初めて「民族政策」の價値は論ぜられるのである。 邊境民族の意思に合致するか否かは、

配力が仲長したものだとは云ひ難いのである。 避境地帶の支配に關する歴史と現實とは區別して

汚へなければ成らない。勿論兩者の間には、 過去の或る時代に領土内にあつたが故に、當然、これを自覺した現在に至つて再び支 現在邊境又は國境地方に對して支配力の増加したのは、一國の國家總力が増加した 邊境支配力の増大をもたらすものは、 何處までも國家總力であつて 密接な關

中國國民黨が、邊境地方をもつて「歷史上、地理上、及び國民經濟上より中華民族の一部」をなすものであると主張 その民族政策の强化に對する正統性を「過去」に求めてゐることは正しくない。孫文も元清雨朝に支那が民族的崩壞 邊境側から支那本土を眺れば、正反對の論説が成り立ち得るからである。

支那民族主義の政治的表現である邊境地帶に對する國民黨の民族政策の檢討も、 か」る態度をもつて望まねばな

- 一、支那現實の國家總力は如何なる內容をもつてゐるか、
- 二、支那邊境地方民族は、如何なる生活を望んでゐるか、
- 支那民族政策は、 云ひ換へれ、ば第一は支那經濟の發展段階であり、 邊境地帶を如何に導いて行くか

第二は邊境民族の社會經濟段階であ

第三は、その雨者の結合形態である。

びつゝ敢行してゐる聖戰の本義によつても、 然らば、 現在の國民黨の民族政策をどう見るかと云ふ問題であるが 既に明白なことである。 且つい 餘り K は も動きつくある政策自體に觸れ 今次我國が多大の犠牲をも忍

文けを云ふに止めやう。 唯、こゝでは、支那經濟機構の發展に伴つて、 その民族主義理論と政策が漸次、その重點を移行して行つたこと

八

統一を翹望するところのセルビヤの大セルビヤ運動との抗争にあつたのである。 ルビヤの四係を見るなれば明かであらう。 民族政策には、二つの型態がある。この事は、第一次世界大戰の導火線となつたオーストリア・ 即ち常時の墺塞關係は、 集合民族國家たる塡洪國の自己保存本能と民族 (神川彦松、 世界大戰原因論、九五 ハンガリ

大することも出來ると考へてゐたのである。 兩頭帝國は、その領土内の民族協調を計ることによつて、 自國の保全を完うすることも又、進んでその領域を擴

ビヤは、 各地に點々と散在するセルビヤ民族(スラヴ族)を糾合することによつて、 國力の發展、領土

糾合的民族主義は進取的である。 後者は民族糾合政策である。多くの場合、 云へば、 政治的領域に比してその國家總力が伴はぬ場合には前者が採用 協調的民族主義は確守的であるのに對

い、その國家總力が過剩した場合には後者が行はれるのを常とする。

ると屢々力説して、 対策である。 壓迫を指摘して その少數民族の絲をたぐつて、領土の併合を計らんとしたので 民族的協調を主張するのに對して、 在に於ても見られる。例へば、 合的民族政策によつて突破しやうと云ふのである。 ヤ及びポーランド政府は、 チェッコ問題・ポ 獨逸第三帝國は、 その領域内の獨逸少數民族に對する保護處置は完全であ チェ 問題をめぐる獨逸少數民族に闘する コ及びポー 即ちチェッコ・ポーラン ランド領内の自國民族

ない。 正代 獨逸が東南歐に對して「人種秩序再編成」を宣言したと傳へられることは、この政策の發展、 强化に外な

×

X

裕を持たなかつた。そして、僅に弱少邊境民族に對する政策の萠芽は、「五族協調」といふ協調的民族主義政策にあ 三民主義創始者をめぐる初期國民黨の民族政策は、 自己民族 漢民族の發展・確立に汲々として、 他を顧る餘

た。とゝに「邊境問題解決」の方法は、糾合的民族政策の採用となつたのである。 紐帶をたぐつて、 國民政府成立後に於ける後期國民黨の民族政策は、邊境地方に點在する漢民族の歷史的・政治的・社會的 その領土を押ー進めて、 漢民族を中心とする近代的な新民族國家を建設しようとするものであつ

國民黨が真正面から糾合的民族政策をふりかざして邊境問題を押し切ららとする時 現實の國家總力は決して十分なものではなかつた。この脆弱性は、 幾多の反撥を蒙る原因となつ

たのである。とくに、國民黨の民族政策には無理を伴ひ、 協調的民族理論と政策の餘韻ある所以である。 遂に破端を生ぜざるを得なかつたのである。 斜合的民族

古版經濟書解

人類の數に關する論述』一千七百五十三年版ロバート・ウォレス著『古代及び現代に於ける

高、橋、誠一郎

and Providence. 中に表明せられて居つたことを自認してゐる。然しながら、 Containing Additional Observations on the same Subject, and Some Remarks on antient and modern Times: in which The superior Populousness of Antiquity is に非ざることを告白し、そがウォレスによつて其の一千七百六十一年の著 Various 、是れよりして誘導せられた断案に於いて正確に彼れの其れと同一なり 彼れが本書四先き立ち一 人口論が決して破天荒の大務見ではなく、 千七百五十二年を以つて公にせる A Dissertation on the Numbers of Mankind in 幾多の先蹤を有するが中にも、 自己の呈示す可き最重要なる議論が確かに斬新なるもの とすら認められてゐる者にロバー マルサスの先驅としてのウォレスの業 maintained. With An Appendix, Prospects of Mankind, Nature Hume's Political Discourse 殊に、其の原理に於いて、